社会福祉法人
埼玉いのちの電話

2018.3 No.87

発行人：川端　純夫　編集：広報委員会
発行所：社会福祉法人 埼玉いのちの電話
〒337-8692 大宮郵便局私書箱第 29 号
電　話：０４８－６４５－４３２２
ＦＡＸ：０４８－６４５－４３５５
http://www.saitama-id.or.jp/

ひとりで悩まずに…

相談電話
048-645-4343（24 時間 365 日）
0120-783-556（毎月10日午前8時から24時間）
フリーダイヤル「自殺予防いのちの電話」

インターネット相談　埼玉いのちの電話　検索

特集

今、生きているいのち ～そのかけがえのなさ～

柳田邦男氏公開講演会より

この広報誌は、赤い羽共同募金の助成を受けて発行しています。

今、生きているいのち
～そのかけがえのなさ～

埼玉いのちの電話　公開講演会

柳田邦男

さいたま市民会館うらわホール　2017/12/17

　いのちを考えるという重いテーマにもかかわらず、こんなにたくさんの方にお集まりいただき、大変ありがたいことだと思っております。私は作家活動をする中で、いのちということをテーマにしているものですから幅広く、日常的な病気の問題、特にガンや難病などの大変な病気の問題、あるいは災害や事故、悲惨な戦争といった形でいのちを奪われる問題、それから最近は子どもの心の発達に大きく関わる絵本の問題についても非常に力を注いでいます。

　今日は「今、生きているいのち、そのかけがえのなさ」ということを皆さんにお話ししてほしいということでお引き受けしました。そこで、私自身が出会ったりあるいは本を通じて知ったり、そうした学びを通して感じたこと、個人的な身内の話を含めて、いのちという問題について幅広く考えていることをお話したいと思います。

　私が母親から学んだことですが、母親は41歳のときに夫を結核で亡くしました。年が離れていて16歳違ったのかな、父は57でした。残されたのが子供5人でした。那須地方の農家に生まれ育った中で覚えたのでしょうね。三つの口癖がありました。「仕方なかんべさ」「なんとかなるべさ」と「たいしたもんだ」。

　これはどういう意味かというと、運命は逆らい難い、人の生き死にというのはどうしようもないもの、そういうものを丸ごと受け入れるしか仕方ないんだという人生観。それから「なんとかなるべさ」というのは大変で経済的にも苦しいし、これから子どもがどういうふうに育ってくれるか大変だけど、しかしコツコツと地道に頑張っていれば人生は開けるんだ、そういう意味なんですね。そして「たいしたもんだ」というのは人を差別した目で見ない。母がよく言うのは、子どもたち5人が嫁いだり自立したりして、たまに誰かの家に訪ねて行く。その中の誰かのところで何か問題があっても、決して悪く言わずに、誰々はよく頑張っている、たいしたもんだ、と言う。親戚などを見ていてもそうですね。あのうちは色々大変だけど、奥さん、よく頑張っている、たいしたもんだと。必ず「たいしたもんだ」が付くんですよ。差別感を持たないで人のありのままを認めていくという人間観なんです。そういう生き方がすごく僕に影響を与えていると思います。

　人間のいのちを考えるときに、人間というのは生まれてから死ぬまで、どんな人でも一編の長編小説なり、あるいは大河ドラマのような中身があるので、それは「物語を生きている」という言葉で言っていいんじゃないかと思います。これは執筆活動をしていると、ある問題を書く時に、そこに関わった人の登場があるわけですが、登場する人物はその人なりの人生を生きているのですが、その人生には必ず山あり谷ありの物語性というのがあります。これは精神医学や臨床心理の観点から言うと、クライアントについて、今この人はその人ならではの物語のどこを生きているのかというとらえ方がとても大事になってくる。誰かが、たとえば失恋したとか大事な子どもを亡くしたとか、そのショックからもう生きていられない気持ちになったりする。その場面だけを捉えたんではお先真っ暗で、この先どうなるのか、何も見えてこない。それまでのその人の生き方や問題が生じた時の対処の仕方などを振り返り、その人の傾向や可能性を探らないと、これからの生き方につながるようなコミュニケーションの展開は生じないと言っていいと思うんです。「大変ですね」で終わっちゃう。その人が今直面している問題は、生きてきた人生の流れのなかで、どんなところで起こっている事件なのか。それがこれからの人生のなかではどんな意味を持つのか。小説でいえば人生全体が第1章から第30章まであるとしたら、今は人生半ばの20章くらいのところの話で、とても大事な、起承転結の「転」になるところなのかもしれないとか。こういうような目で見ると問題の本質が見えやすくなってくるのだろうと思うのです。

あるドクターがガンの末期の年老いた女性の患者さんを引き受けることになって病室に行く。私はなんの何々ですと自己紹介してベッドサイドの椅子に座り、これからよろしくお願いしますと、落ち着いた雰囲気で話しかける。そのお医者さんは患者の気持ちにさりげなく寄り添うという姿勢ができている。直感的に患者さんのことが分かる。そこで患者さんの方がぽつりぽつりと自分の悩み、不安をしゃべり出すんですね。そのおばあさんは、自分の生い立ちから若き日のこと、戦後の苦しかった時期のこと、そんなことを回想するようにして、ゆっくりと話すのです。ドクターは忙しそうにすることなく、じっくりと聴いてあげたのです。おばあさんは、話が進むうちに、心が安定してくるんですね。自分が生きた人生を聴いてくれる人がいる。お医者さんが今日はどうですか、血圧が高いですね、とかそういう上からの目線の会話じゃなくて、自分の人生に丸ごと耳を傾けてくれる。そのことだけでおばあさんが安心感と心の安定を無意識のうちにつかんでいく。そして、突然、「あとどれくらい生きれるでしょうか」と言ったんです。もうガンが転移していることは自分で分かっている。いつお迎えが来るのか不安の中にいる。お医者さんの方もだいたいひと月かふた月くらいしか持たないのじゃないかなと思っているけど、そんなことをズバリ言って絶望されたら大変ですね。そこでハッと考えて非常に婉曲に、「桜が見られるといいですね」と言ったんです。時期は暮れのことだったのだけれど、そうしたらおばあさんが「花が見れますか、そうですか、ありがとうございます」と言ったんですね。このドクターのコミュニケーションは平凡に見えるけれども、本当にきめ細かな、思いやりのある気持ちがこめられていて、でも嘘はつかない。そしておばあさんは最後に「色々話を聴いて下さってありがとうございます。早うお迎えが来ますように」とおっしゃった。

今まで死に対する不安、恐怖の中で揺れ動いていた気持ちが、自分の人生を丸ごと短時間であってもドクターが聴いてくれた。自分がこの世に生まれ、育ち、生きたという証を共有してくれた。そのことがおばあさんの心理的な安定を引き出していくことができた。傾聴というのは不思議な力を持っているのですね。「早うお迎えが来ますように」と自ら言うことは死を受容する、受け入れる、そういう気持ちがわいてきたことを示していますね。これは人が物語を生きているということ、そして物語ることによって見えてくるものがある、そんなことを学ばせてくれる一例だと思います。

もう一つ、今の話のなかですでにお分かりのように、いのちとは、肉体的身体的ないのちだけではない。遺伝子の働きで人間のいのちの生命現象というのは営まれているわけですけど、それは物としてのいのちの側面ですね。しかし、それだけで人間の営みがすべて決められているわけではない。遺伝子の働きによって決められてないものは何かというと、それはその人の感情生活や精神生活や信仰生活や、心の絡む問題、精神性の問題。これが人間と動物がもっとも違うところですね。

こういういのちの生物学的側面と精神学的側面の２面性を考えると、人間のいのちの営みというものは複雑な感情生活、知的な生活、宗教生活、そういう喜び、悲しみ、怒り、あるいは祈り、様々な面を持っているのですね。そこをちゃんと見ないと、生きるとは何かとか、いのちとは何かということが見えてこない。

ここでご紹介したいのは、30年以上前のことですが、70年代、三重県の桑名市の、教会の牧師さんの奥さん、まだ40代半ばでした、原崎百子さんとおっしゃいますけど、百子さんが死を前にして書き残していた日記を、ご主人が亡くなった後に「わが涙よ　わが歌となれ」というタイトルで発行し、大きく話題になり、ドラマにもなった方です。当然、信仰の力というものに心を揺さぶられ

地域発展のエネルギー

武州ガス

川越市田町 32-12　　TEL (049) 241-9000

て読んだものですが、最近復刻されたので、改めて読み直し、百子さんの最期の生き方に、時代を超えた普遍的な意味があることを再確認しました。亡くなるひと月くらい前でしたでしょうか、肺ガンの転移が分かってもう治療の方法はない、残るいのちは短いと分かって、それをご主人が医師から告げられるわけです。

牧師の原崎さんはものすごく悩んだ、妻に告げるべきかどうか。悩んで苦しんで、とうとう決意するんですね。妻はクリスチャンとして信仰が篤い、きっとこれを受け入れて、自分を見つめて最期の日々を過ごしてくれるだろうと。それで告げるんですね。その日の百子さんの日記の抜粋ですが、こんなふうに書いています。

「ありがとう。ありがとう。よく話して下さったわね。かわいそうに、さぞ辛かったでしょう。辛かったでしょう。そうだったのね。いろんなことがそれで分かってきた。私の生涯はこれからが本番なのだ。これまでの一切は、これからの日々のためのよい準備でもあった」と書くんですね。ご主人の方が奥さんに辛かったねって言うのじゃないんです。死を前にした妻が夫に対して、真実を告げるか告げないか、迷いに迷って辛かったでしょう、と逆に慰めているのです。しかも「私の生涯はこれからが本番なのだ。これまでの一切は、これからの日々のためのよい準備でもあった」と言い切っている。それは高邁な宗教心なり神代への信仰なのかというと、そうじゃなくてこう続くのです。「それでもやはり私はリンゴの木を植える、二郎の助動詞を復習してやること、忠雄の勉強の相手をしてやること」。中学生の男の子が2人いました。次男には助動詞について文法の勉強をさせる、長男には色々と難しくなってきた勉強の相手をしてやる、こういう日常の、毎日母としてやってきたことをそのまま続ける。しかも、リンゴの木を植える、という言葉を添えていますけど、これは有名な宗教改革者のマルティン・ルターの言葉として伝えられるものです。「たとえ明日、地球が終わりであっても、私はリンゴの木を植える」。この言葉を百子さんは自分の死生観や人生観としてしっかり胸に刻んでいて、それが揺ぎないものになっていたのでしょうね。リンゴの木を植えるということはポジティブに今日も明日も、一時一時を大事にし、かけがえのない自分のいのちを全うする。こういう心情がこの言葉で支えられている。そして母として努め、子どもにしっかり勉強させる、揺ぎない歩みを子どもに歩ませていく、ということですね。これ以外には主婦として何をやるべきか、女性として何をやるべきか、3本立ての決意があるのですが、特に子供たちに対して母としての役目として、たとえ明日自分があの世に行ってしまっても、今日という日リンゴの木を植える、そして最期まで生き切る、日常性を失わない、こういうことを表明している。信仰の力とはこういうものかと私は学びました。

終末期医療の先駆者である柏木哲夫先生が日本で初めてぐらいに淀川キリスト教病院でホスピスを作られた。柏木先生がある時もう本当に1週間もつかもたないかという患者さんのベッドサイドに行って、ゆっくりと座って、そして「お変わりありませんか。今日の気分は如何ですか」と訊いたんですね。患者さんが枕辺に置いておいた青い色紙を出して「こんな気持ちです」と言ったんだそうです。柏木先生、さすが精神科医でも分からない。ちょっと首をかしげて「申し訳ありません、どういうことですか」って訊いたんだそうですね。そしたら色紙の四隅が切ってあって、「すみきった青空です」と。〈笑い声〉

まあ、これくらいユーモアがあると同時に、本当に自分の心をちゃんと整理して伝える、それくらい心のゆとりが持てる最期の日々を送っているのですね。素晴らしいなあと思いましたね。これは感銘深く、私もユーモアを忘れないようにしようと思っているわけです。

もう一つお話ししておきたいのは、「死後生」という死生観です。このキーワードは私がつくりました。これは決して宗教的なものではないのですが、あるいは半分ぐらい宗教的かもしれないけれど。人間が一生を生きること、そしてその延長線上に死をどう位置付けるかということなのです。特にいのちの精神性に目を向けたときに、従来のライフサイクルの考え方は間違っているとさえ言いたくなるのです。

「死後生」とは何かというと、まあ定義するわけじゃないですが、肉体は無くなっても人の生きた証しですね、生きざま、精神性、こころ、あるいはそれを表現した言葉。例えば私が兄や母から受け継いだものというのは、今でもこころの中で生きているわけです。そのように、亡き人がこころの中で生き続けることによって、これからを生きる人の人生を支えたり膨らませたり、より輝くものにしたりしていく。こういう形で、いつまでも人のいのち、精神性のいのちは終わらない。そして「死後生」ということを意識したときに、とても大事な学びがそこから生まれてくる。それはどういうことかと言うと、「死後生」をより良いものにしようと思った途端に、自分は今、そのために何をすべきか、どう生きるべきかというところに問いが帰ってくるわけです、否応なしにね。今最後の人生の大事な最終章を生きているという時に、あるいはもっと前から、どう生きたらいいのかという考え方をしなければならないんですね。予備校の有名な某先生によれば「今でしょ！」ということになるのですね。〈笑い声〉このように「死後生」を自覚すると、今どう生きるかということまで考えるようになるわけです。

私がなぜ絵本を今一生懸命自分でも読み、また色んな形で普及活動をやってるのかというと、例えばですね、人生非常に危機的な状況になったり死が近づいたりした時に、絵本がどんなふうに支えになるかということでね、色々と学ぶことがあるのです。それは自分自身の今抱えている問題や、あるいは歩んできた人生経験、それと絵本の物語を重ね合わせることによって見えてくるものがあるんですね。それを読み取れるかどうかというのは、その人の自分の人生の見つめ方であったり自分の経験の豊かさであったりするわけですけれど。でもともかく絶えず自分の思いや直面している問題や人生全体を、絵本が語ってくれるものに重ね合せて二重写しにして見ると、絵本が何を語っているのかというのが見えてくるんですね。とても大事なところだと思うんです。

かけがえのないいのちということは、よく言われますが、かけがえのないいのちを、どう生きるのかということは、今までお話したように多面的多角的にいのちをとらえることによって初めて見えてくるのではないかと思います。本当に年齢に関係なく幼き子も年老いた人も病気の人も、もう皆同じように自分の人生の日々を重ねることによって、本当により良い形の最期の日を送れるようになる。こういうことをお伝えしたかったわけです。

— あゆみ —

2017 年

12 月 3 日　電話ボランティア募集説明会（所沢ミューズ）

9 日　電話ボランティア募集説明会（クラッセ川越）

10 日　電話ボランティア募集説明会（大宮ソニックシティ）

17 日　公開講演会（さいたま市民会館うらわ）　柳田 邦男 氏
「今、生きているいのち ～そのかけがえのなさ～」
電話ボランティア募集説明会（さいたま市民会館うらわ）

2018 年

1 月 13 日　電話ボランティア募集説明会（大宮ソニックシティ）

21 日　自殺予防対策事業講座　林 義子 氏
「林義子シスターを囲んで～創立期の熱い思いを聴く～」

2 月 19 日　第 78 回後援会理事会

3 月 10 日　自殺予防対策事業講座　山﨑 広子 氏
「人生を変える『声』の力」

19 日　第 68 回理事会

24 日　第 23 回チャリティ映画会（大宮ソニックシティ）
「しゃぼん玉」 バザー同時開催

27 日　第 57 回評議員会

チャリティ映画会 & バザー

■ 2018年3月24日(土)　10:30 / 14:00(2回上映)

■ 会場　大宮ソニックシティ 小ホール

■ 上映映画 **しゃぼん玉**　これからが、これまでを変えていく。

原作: 乃南アサ　監督: 東伸児　主演: 林遣都・市原悦子

協力券　1,000円

会場ロビーにてバザー開催(10:00～14:00)

＊ 午前の部は、視覚障がいの方々に**«音声ガイド»**を実施
（希望者は上映中に携帯ラジオの FMでガイドを聴きます）

＊ 午後の部終了後、**監督・東伸児さんのアフタートーク！**
詳細は埼玉いのちの電話ホームページをご覧ください。
問合せ: 埼玉いのちの電話事務局 048-645-4322(月～土10:00～17:00)

あなたのご支援を必要としています

いのちの電話の活動は、多くのボランティアの無償の奉仕によって支えられています。
この活動をご理解いただき、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

振込先

郵便振替　00140―9―137380
加入者名:社会福祉法人埼玉いのちの電話
ゆうちょ銀行自動引き落としの方法もあります。詳しくは事務局にお問い合わせ下さい。
埼玉りそな銀行大宮支店　(普通)4315510
口座名:社会福祉法人埼玉いのちの電話

ご寄付いただいた方へは、事業報告や広報誌の他、様々な催し物のご案内などをお送りしております。埼玉いのちの電話は寄付金控除の指定を受けている社会福祉法人です。ご寄付は税法上の優遇措置があります。

柳田邦男氏の公開講演会に多くの方々のご来場をいただき、ありがとうございました。アンケートに寄せられた感想の一部をご紹介いたします。

・とても心にしみる話でした。
・いのちは終わらないという言葉に勇気をもらった。
・共感してくれる人がいることは大事だとよくわかった。
・一人ひとりに丁寧に向き合わなくてはと思った。
・やさしさの溢れる話だった。
・「傾聴」についての話が興味深く、その重要性を認識した。
・絵本の話も素敵だった。もっと聞きたかった。
・「大丈夫だよ、ぞうさん」は知らなかったので読んでみたい。
・うつに悩んだ今年だったが、話を聞いて受け入れられるようになった。
・充実した時間を過ごせて嬉しく思う。
・柳田先生の深い人間性が感じられた講演だった。
・今日来て、本当に良かった。

編集後記

柳田邦男さんは 81歳になられたそうです。公開講演会では、柳田さんの要望もあり、演台にはピアノ椅子を用意しましたが、柳田さんはスタンドからマイクを外して握り、パワーポイントを操作しながら、2時間 30分立ち通しで、いのちについて穏やかに力強く語られました。講演でおっしゃっていますが、“今を生きる” ということの体現のように感じました。終演後、控室をたずねると、椅子に腰かけられて渇いた喉を静かに潤されていました。(M.O)

- 共に生き、共に育つ -
高度で信頼性の高い情報サービスを提供し、
顧客第一主義に徹します。
人皆それぞれに必ず長所があることを認め合います。
互いの弱さをカバーしあい共生し共に育ちます。
NCS　埼玉で創業 45 年、お客様と共に
ノグチコンピュータサービス株式会社
埼玉県さいたま市中央区下落合 1085-15
048(824)1099（代表） http://www.ncsnet.jp

来てオトク、見てナットク！
体感すまいフェア
分譲住宅　注文住宅　2018.3.20(火)まで
特典いろいろ　うれしい
来場予約で、豪華プレゼントがもらえる！
住まい価値創造企業
POLUS
ポラスグループ
ポラス株式会社　埼玉県越谷市南越谷1-21-2
TEL 048-989-9119（宅建業　国土交通大臣(11)第2401号(株)中央住宅）